武はこころなり

全国有数の古武道史料である富永コレクション（牧堂文庫）を残した故富永堅吾（とみながけんご）氏は、明治十六年（一八八三）、現在の菊池郡菊陽町津久礼に生まれた。

合志義塾を経て熊本師範学校に学び、地元の原水尋常高等小学校に勤めた後、東京高等師範学校に進み、広島高等師範学校、東京府立第一中学校、母校の東京高等師範学校などの教職を歴任。昭和八年に帰郷し、熊本県中央高等女学校の校長のかたわら、約三十年にわたり武道史の研究に努めた。

その人となりを子息の富永文夫氏（故人）は、富永堅吾氏の死後に刊行された『史実宮本武蔵』のあとがきで次のように書き綴っている。

「父は武を愛し、新陰流、小野派一刀流、伯耆（ほうき）流の居合を学び、いずれも免許を得ているのであったが、いわゆる段を取ることは余り好まなかった。七段の位も、教士号も、熊本に隠棲（いんせい）してから贈られたものであったと記憶している。『武はこころなり』とは常に口にした言葉であり、武を学ぶ者は須（すべ）らく人格高潔なるべしとの心を持っており、技にいかに秀でていても、人格がこれにともなわなかった人などは、嫌ったものであった。」

（富永堅吾著『史実宮本武蔵』あとがき）

四十九歳で郷里に戻ったのは老齢の両親のためであったが、それをきっかけに武道研究に専念する決心もついたという。望まれて熊本県中央高等女学校長となり、戦時中は村の農業協同組合長にもなった。何事にも徹しなければ気のすまない性格で、心から打ち込んだ。戦中から戦後の食糧難時代には自ら鋤鍬（すきくわ）を取って田畑を耕し、羊（やぎ）を飼い、山羊を育てるなど、一時も休むことを知らぬ一生であったという。書画骨董が趣味で、刀剣は特に好んだが、高価なものは買い得なかった。牧堂（ぼくどう）と号して書もよくしたが、武蔵の独行道を書いたもの以外は何一つ書き残していない。老後は釣りを楽しみ、「堅吾先生の川走り」として有名であったわりには上手な方ではなかった、と富永文夫氏の文章にある。

『史実宮本武蔵』と『剣道五百年史』の草稿が残され、『史実宮本武蔵』が富永文夫氏によって刊行されたのは昭和四十四年九月。富永堅吾氏が亡くなって約十年後、さらに大著『剣道五百年史』が刊行されたのはその三年後、十三回忌を迎えた年であった。

収集された古武道資料は二千三百点余に及び、平成二十一年、嫡孫の浩行氏から一括して熊本県立図書館に寄贈された。その内容は武道諸流派に及び、熊本藩ばかりでなく、人吉相良氏、柳川立花氏一門、江戸や仙台藩など諸藩にも関係しており、稀有な史料群となっている。

富永堅吾略歴

明治16年12月10日	富永大平、シカの長男として菊池郡菊陽町津久礼1943番地に出生
明治37年３月28日	熊本師範学校卒業
明治37年４月13日	菊池郡原水尋常高等小学校訓導拝命
明治39年４月16日	東京高等師範学校入学
明治42年３月31日	東京高等師範学校卒業
明治42年４月10日	広島高等師範学校助教諭兼訓導拝命
大正元年９月７日	東京府立第一中学校教諭拝命
大正12年３月31日	東京高等師範学校研究科に入学
大正13年３月15日	東京高等師範学校研究科卒業
大正13年３月31日	東京高等師範学校講師委嘱
大正13年11月24日	現職のまま東京鉄道中学教諭嘱託
大正14年２月15日	「最も實際的な學生劍道の粋」出版
大正15年10年20日	「剣道達人腕比べ」出版
昭和６年５月16日	東京高等師範学校及び東京鉄道中学退職
昭和８年９月１日	郷里の熊本に帰り、熊本県中央高等女学校長委嘱
昭和15年３月31日	熊本県中央高等女学校長退職
昭和35年９月17日	死去（76歳）
昭和44年	遺稿「史実宮本武蔵」発行
昭和47年	十三回忌を機に遺稿「剣道五百年史」発行

「史実宮本武蔵」より

史実宮本武蔵

「僕は歴史家でもなければ、文士でもない。一教育家の端くれである。けれども、若い頃剣道に精進し、これが指導教授に当たったことがあり、この道に対する関心はひとしおのものがあって、いささかこれが研究に没頭して来た。そして肥後生まれの関係からでもあろうか、武蔵会の一員として、武蔵に対する思慕敬虔人一倍のものがある。」

富永堅吾

（富永堅吾著『史実宮本武蔵』はしがき）

宮本武蔵の研究は富永堅吾氏にとってライフワークであった。

武蔵の実像を世に伝えようとして出された本は明治四十二年（一九〇九）四月、宮本武蔵遺蹟顕彰会編纂で刊行された『宮本武蔵』が嚆矢（こうし）であろう。この顕彰会は阿蘇南郷の郷士で、二天一流を修め、第一回の衆議院議員に国権党から選出された長野一誠が中心となって組織されたものだ。著者は国学者の池辺義象だ。その目的は世間の武蔵像の偽りを正し、真を顕すためであった。それは富永氏の著書『史実宮本武蔵』も変わらない。しかし日清・日露戦争に勝利し、大和魂、武士道精神が大いにもてはやされた時代と戦争に敗れ、国民が一様に自信を喪失した後では異なるものがあったであろう。

ここ近年、細川家文書などの整理・調査が進み、新たな史料の発見などもあって宮本武蔵に関しても新たな視点による著書も現れている。しかし、富永氏の『史実宮本武蔵』は少しも色あせておらず、むしろ輝きを増している。それは史料を幅広く収集し、吟味し、あくまで史料でもって語らせようというストイックなまでの姿勢でつづられているためであろう。長く教育現場にあったこともあろう富永氏の文章は、少しも晦渋（かいじゅう）なところはなく、端正で、無駄がなく、読みやすい。

富永氏が基本としているのは「二天記」のようである。巌流島の決闘を含め、ほぼ事実だとしている。「二天記」が成立する過程などもよく調べられている。武蔵は宮本無二斎を父として天正十二年（一五八四）に美作国吉野郡宮本村で生まれたとしている。武蔵は名を玄信といい、幼名は弁之助、晩年に二天道楽と号した。姓は自ら新免または宮本を用いた。寛永十七年（一六四〇）に松井興長を頼り熊本を訪れ、細川忠利の客分として七人扶持十八石、合力米三百石と屋敷が与えられた。正保二年（一六四五）五月十九日に没した六十九余年の生涯で、武道を中心として歩いた事跡は、武蔵自ら五輪書に記している序文によって最も端的に窺われるという。

「二天記」に重きをおきながらも、筑前国福岡藩の二天一流の兵法家丹治峯均による筆記などを無碍（むげ）には退けてはいない。父無二斎の謎を解くうえにも用いていて、無二斎は郷里宮本村で没したのではなく、他郷に去って慶長十二年（一六〇七）までは生きていたことは確かだと主張している。ことに黒田藩とのかかわりに触れ、豊前国中津にいたのは確実であろうとしている。

剣豪丸目蔵人佐と大坪流馬術皆伝の殿様

丸目蔵人佐長恵は、天文九年（一五四〇）に相良氏の支配領域の中心であった八代に生まれたとされる。

少年のころから剣術を好み、十七歳のときに本渡城主の天草伊豆守のもとで兵法の手ほどきを受けたとされる。以後、諸国を修行し、上泉伊勢守（後に武蔵守）信綱の弟子となった。

丸目蔵人像（個人蔵）

長恵は、足利義輝の命で信綱が兵法の上覧披露した際に信綱の打太刀を務め、丸目の「打太刀」は「天下之可為調宝」と義輝から激賞された。永禄十年（一五六七）二月に信綱から「殺人刀」と「活人剣」の新陰流の秘伝印可（免許）を受けた。その後人吉に戻り、相良義陽のもとで薩摩国大口城の在番をしていたが、永禄十二年（一五六九）の砥上合戦で、島津勢の誘いに乗って大敗を喫し、相良氏の支配領域を大口方面から撤退させる原因を作った。そのため長恵は閉塞した。伊勢守の死後、新流を開き、新陰タイ捨流と称した。江戸に出て、将軍家指南役になっていた柳生宗矩に試合を申し込み、宗矩から「勝敗を争って二人の達人の一人を失うのはまことにしのびがたい。貴殿は関西の兵法日本一、私は関東の兵法日本一、そういうことにしてはいかがであろう」と言われ、「西日本の天下一」を称したという。

人吉藩初代藩主の相良長毎に仕え、新知百十七石を得て、藩主並びに家中の師範役として仕えた。隠居して徹斎と号し、切野原（球磨郡錦町）を開墾した。寛永六年（一六二九）二月七日、九十歳で没し、「雲山春龍居士」の法名で眠っている。

タイ捨流は肥前国佐賀藩、筑後国柳川藩、薩摩国鹿児島藩などにも広まり、なかでも佐賀藩では『葉隠』の山本常朝を出した中野家に代々伝わり、藩主も習ったという。

人吉藩三代藩主の相良頼喬は、寛永十八年（一六四一）に二代藩主頼寛の嫡男として江戸屋敷で育ち、寛文四年（一六六四）閏五月七日に頼寛の隠居に伴い家督相続している。その一ヵ月後に大坪流馬術の荒木十左衛門尉元政から「手綱之目録」等の伝授を受け、翌年の寛文五年五月に「百首之馬書」の伝授を受け寛文九年（一六七〇）に『六角抄』と「秘奥書」の伝授を受けて皆伝している。いずれも頼喬が大坪流馬術に「執心」であったとされ、若いときから江戸で大坪流馬術の習熟に熱心であったことが認められる。

人吉藩では十一代藩主長寛が学問を好み、細井平州に学び、東白髪らを登用し、天明六年（一七八六）に藩校「習教館」を創設し、天明八年（一七八八）に武芸所「郷義館」を創設し、藩士の教育に努めた。

手綱之目録他（富永コレクション）

藩校の武芸所 東榭・西榭

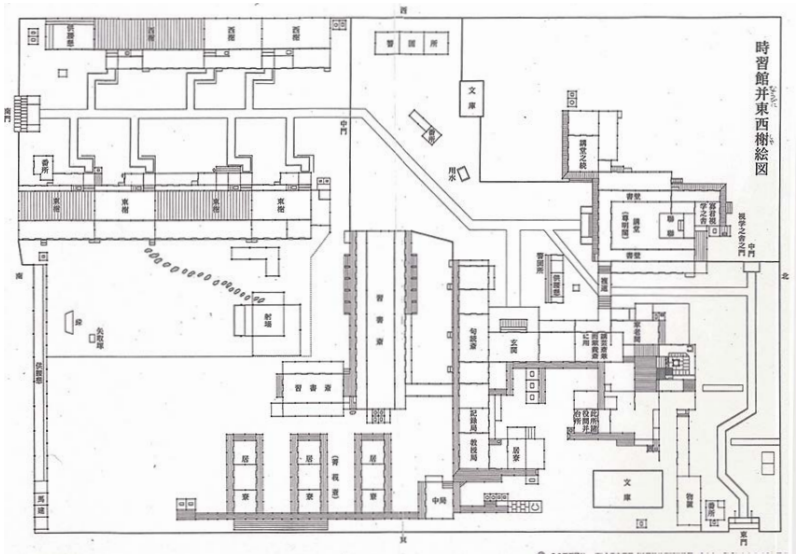
宝暦五年（一七五五）、六代藩主重賢は、藩校（学校）として時習館を創設した。藩校は熊本城二ノ丸内に設けられ、学問とともに武芸の鍛錬も行われた。藩校の武芸所を、東榭・西榭といい、藩校の敷地内南側にこの両榭が置かれた。

そもそも熊本藩の藩士は、それぞれの流派の師範に入門して武芸の鍛錬をしていたが、東榭・西榭ができてからは、従来どおり師範について武芸の鍛錬をし、さらに東榭・西榭でも稽古を行うようになった。

東榭・西榭の出入りは、原則として十五歳以上とされ（抜群壮健の者、武芸術が器用の者など例外もあった）、稽古は一月十五日から十二月二十日まで行われた。東榭・西榭で行われる稽古は、例えば一のつく日には何流の何術の稽古というように決められていた。

『時習館並東西榭教法』（永青文庫蔵）「東西榭稽古之事」によれば、軍学、射術、槍術、剣術、居合、柔術・組討・捕手・小具足、長刀、棒・野太刀、螺・陣太鼓は、平日は師範宅にいって稽古し、流派ごとに決められた定日は東榭・西榭で稽古をすることになっていた。ただし、犬追物、馬術、砲術、火術、船軍術、游術については、各流派の教場で稽古を行うこともあったと記されている。

富永コレクションには、熊本藩の武道各流派の貴重な史料とともに東榭・西榭の史料も収集されており、江戸時代後期の肥後武道の様子を今に伝えている。



時習館並東西榭絵図（熊本市作成）

熊本藩武芸師範諸流

北条流兵法　楠流軍学　山鹿流兵法　謙信流軍学　大江流（当時八幡流）兵法
新陰流兵法　二天一流兵法　新陰流剣術　当流新陰流剣術　雲弘流剣術　寺見流剣術　四天流剣術
竹林流射術　日置流射術　吉田流射術　吉田当流射術
宝蔵流槍術　加來流槍術　家流槍術
伯耆流居合　真道流居合　関口流居合　新心無手勝流居合　揚心流居合　四天流居合
四天流組討
竹内流柔術　扱心流柔術　揚心流柔術
天下無双流捕手
揚心流長刀　古流長刀
真道流棒術
三破神伝流砲術　太田流砲術　宇多長門流砲術　渡辺流砲術　御家一流木石火矢並稲富一火流砲術　公儀御流砲術　種子島流砲術　高安函三流砲術　荻原流砲術　新渡西洋流砲術
小堀流游
陣貝太鼓　犬追物

弓馬術名人の細川幽斎から始まる熊本藩の馬術

細川幽斎（一五三四～一六一〇）は本名を藤孝といい、隠居後に幽斎玄旨と号した。足利義輝・義昭、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康といった室町末期～江戸初期にかけての将軍や天下人に仕えた戦国大名であり、文化人でもある。

実父は室町幕府奉公衆の三淵晴員、実母は公家で学者の清原宣賢の娘。養父が和泉国半国守護で晴員の実兄の細川元常といわれる。足利義晴・義輝・義昭に仕え、取次として室町幕府の中枢にいて、日常の環境が幕府の職制や儀式作法に精通する立場にあった。永禄九年（一五六六）に足利義昭を奉じて朝倉義景を頼って越前一乗谷に入っても『故実条々記』を筆写し、室町幕府再興後の武家故実の保存を図っていた。このように武家故実に明るい幽斎は弓馬軍礼故実にも詳しく、弓は波々伯部貞弘から天正八年（一五八〇）五月七日に相伝を受け、騎射儀礼の伝書である『遠笠懸記』に奥書を残し、騎射に係る著書に『弓馬記』を記した。慶長九年（一六〇四）には弓馬軍礼故実を伝えてきた若狭武田氏の武田信直から継承を依頼されている。

武田流流鏑馬演武（平成20年熊本城お城まつり）

このように幽斎は古今伝授を始めとする公家故実と室町幕府で様式化した武家故実といった有職故実全般と共に「弓馬はいふに及ばず、和歌・連歌・鞠・包丁・打ちはやし」といった諸芸までも「其道の極にいたる迄」通じていたと松永貞徳の『戴恩記』で評されている。その幽斎が最も得意としていた諸芸の一つが馬術であった。

幽斎は慶長十年三月二十三日に小姓で歌道の弟子でもあった竹原惟成に自筆の『弓馬記』『故実記』を渡し、慶長十五年八月三日には惟成に命じて武田信直から弓馬軍礼故実を相伝を受けさせ、「武田家御書物」「免状」を伝授させた。これが現在の熊本に伝わる熊本県指定重要無形文化財の武田流流鏑馬で、現在も惟成の直系子孫の竹原家が相伝して作法を守っている。竹原家は明治～昭和期の十一代親雄、十二代正文ともに馬術を大坪流で習得しており、大坪流は熊本藩で広く流布した馬術であった。

六代藩主重賢も弓馬の達人とされ、馬術は大坪流と解龍流を習得していた。熊本藩では住谷家が大坪流を、中津家が解龍流の師範を務め、それぞれ師役の家とされていた。天明四年（一七八四）二月には斉藤権之助と江良又十郎が師範となり、犬追物を復興した。天明六年十二月二十四日に七代藩主治年はこれを見学し、寛政八年（一七九六）四月六日には八代藩主斉茲が徳島藩主蜂須賀治昭の勧めで江戸白銀の下屋敷に白河藩主松平定信、彦根藩主井伊直中、鳥取藩主池田治道を招いて犬追物を主催している。

このように熊本藩は室町幕府以来の武家故実を重んじ、弓馬軍礼故実を江戸幕府と共に伝承する、室町文化を残した貴重な藩であった。

細川三代と兵法者たち

近世細川家の初代藤孝（幽斎）は元服し、十三代将軍足利義輝の側近くに仕えた。義輝はなかなか剛勇で、兵法を身につけることに熱心だったという。『剣道五百年史』によれば新当流の開祖の塚原卜伝や新陰流の祖の上泉信綱などを招いている。藤孝も卜伝の門に入ったという。義輝は二条城を松永秀久らに襲撃されて殺害されるが、将軍みずから太刀を振るって奮闘している。名刀を何本も畳に突き刺しておき、刃こぼれすると代わりの太刀を取って闘い、ついには力尽きて倒れたという。

二代忠興（三斎）も父に似て文武両道に勝れていた。天下無双流を桜庭采女正広正に学び、疋田陰流の疋田豊五郎（文五郎）や岩流の佐々木小次郎などを召し抱えた。

疋田豊五郎　鑓之目録（富永コレクション）

疋田豊五郎は新陰流の上泉伊勢守（後に武蔵守）信綱の門人で、伊勢守が武者修行で京都方面に上ったとき、神後伊豆守と随従した。伊勢守が柳生で柳生石舟斎宗厳を指導し、さらに廻国修行に出かけたとき、疋田はなお柳生に留まって宗厳の修行相手を務めたという。

疋田は柳生を去り、武者修行を重ね、丹後国に入って忠興に仕え百五十石を給されたが、その後辞してさらに廻国し、慶長六年（一六〇一）、小倉に行き、丹後から豊前に転封されていた忠興に再び召し抱えられた。忠利の剣術の師範となり百五十石を給され、その後二百石の加増があった。槍術にも勝れて、師範でもあった。疋田には嗣子がなく、高弟の上野左右馬助景用に伝えられた。左右馬助は細川家に仕え、忠利・光尚の師範となり、肥後の新陰流師範上野家の初代となる。忠興は晩年に柳生宗矩の紹介で雲林院（氏井）弥四郎を招聘する。

三代忠利も武道を嗜み、自らも修行した。小倉時代に楠流軍学の師範の竹田貞右衛門、大江流の小田原入道夕庵、同流の八十市太夫明貞を召し抱え、家中の指南をさせた。砲術は高安函三流の中村助之進を召し出し、剣術は柳生但馬守宗矩に入門して教えを乞うた。柳生の代理として高弟の田中甚兵衛が江戸の細川邸に出かけて指導したという。忠利と柳生宗矩との間はいたって入魂の間柄であった。二代目の田中甚兵衛は熊本藩に召し抱えられ、田中家は代々柳生流師範として重きをなした。

忠利は、二階堂流の松山主水を召し抱え、近習の村上吉之丞と共に主水から「八文字の伝」を受けたといわれている。

忠利は柳生家に出入りする梅原九兵衛という剣術家が気に入り、家臣の波多中庵を使いにして、三百石で召し抱えたいと宗矩に申し入れた。剣術の遣い手を嫡男光尚に付けてやろうということであったが、それを光尚がもう少し禄高を上乗せしようとした。忠利は「柳生流の面子で、知行を過分に遣わすべきではない。そのような家に成り下がっては情けない」と意見したという。

武者修行と他流試合の隆盛

江戸時代の剣術の各流派は長い間にわたって秘密主義を採り、入門の際の起請文や伝書で、親兄弟でも他見他言を禁じるのが一般的であった。流派の伝書になるとランクがあがるほど口伝、面授の口訣など、文字にして遺すことを避けたり、伝授の際に伝書で死後に燃やすことや返納させることを約束させたりしている。道場では武者窓を背より高くして、道場内を外部から覗かせないようにする工夫もされた。加えて、殺傷事件に発展する可能性があるため、幕府が他流試合を禁じ、地方の藩でも準用された。このような中で、剣術は「形」を重んじるようになり、「形」の修行に向けて形式化し、流祖の実戦を通じて会得した「形」から意味を失った「形」への様式化に進み、机上の業で「形」の数が増えたり、外観上の体裁を良く見せる傾向に進んだといわれる。

千代田之御表 武術上覧（富永コレクション）

その一方で、武家の兵備上の訓練として各流派師範のもとで比較的自由選択で修行が行われていたが、十八世紀後半になると藩が学校を設立し、教育上の制度や修行上の規定を整えて、文武奨励を重点政策にするようになる。熊本藩の時習館、宇土藩の温知館や人吉藩の郷義館はその事例である。

各藩は優秀な武芸者を指導者として雇用し、武芸者にとっては武道が仕官の方法になり、藩士にとっては武道を修めることが家禄の保全に繋がった。学問の習得も重んじられたが、藩の方針によっては文武の比重がまちまちで、武士でもあることから武道の比重が高いことが比較的多かったとされる。

十九世紀になると士風の乱れを正す目的や対外問題の影響、国学の影響などから武道が見直され、特に対外国防上の必要や国内治安の観点から武道修行が奨励されるようになる。

万延元年（一八六〇）に十一代藩主慶順が就任すると三日おきに時習館を視察し、両榭で不意に側近に試合を求め、武道の練磨と振興を図った。また諸流の寄合稽古も視察し、自身も武道の稽古を行っていた。

また、竹刀稽古が大いに普及進展してくることで、変化が生まれてきた。竹刀による試合であれば防具を着けており、四肢身体を自由に働かせ、心身籠めて打ち合っても殺傷などの危険の心配がなく、競っても勝敗がわかりやすいこと、そして、勝負上の好奇心にかられ他流と試みたいということから、他流試合が盛んに行われるようになった。そういう背景から、久しく行われていなかった異なる諸流の剣士を集めての試合大会が催されるようになった。

諸藩は武道を奨励し、他流試合の禁を解き、他藩からやってくる修行者を歓迎して藩士の修行を積ませる一方、有望な藩士の武者修行を許可したり、江戸の千葉周作等の著名な道場に研究目的で派遣したり、在江戸の藩出身者の道場で修行を積ませた。

熊本版「武士の献立」正月料理

細川幽斎は若いときから室町幕府の礼式や行事などのきまりである有職故実を学んでいた。その有職故実の中には料理の作法も含まれている。そのため幽斎は「包丁」といわれた料理にも長けていた。

幽斎の従兄弟で、京都吉田神社の神職家の吉田兼見の日記である『兼見卿記』の天正十年（一五八二）十一月十二日には吉田盛方院宅で幽斎が鯉料理を披露したとあり、京都の公家の山科言経の日記である『言経卿記』の文禄三年（一五九六）でも幽斎が「鯉包丁」を披露して「見事」であったと記録している。『細川幽斎年譜』でも徳川家康が吉田兼見邸を訪問した際に山科言経・柳原淳光・山名禅高らと碁を打った後、幽斎が「鯉包丁」を披露したとある。このように幽斎は「鯉包丁」が得意で、もてなしの席で披露していた。

そのため江戸時代に作られた古今の武将の逸話集『名将言行録』には幽斎が鯉に仕込まれた火箸ごと刀で鯉を切り落とし、火箸とまな板もろとも真っ二つにしたという達人ぶりを述べた話がある。また、六条門跡が幽斎に川鱸（川で捕れた鱸）の料理を所望したところ、その場所が六条川原院（平安期の源融の屋敷で陸奥国塩釜を模した庭園があったとされる）の由来がある場所と理解した幽斎が機転を利かせ、故実に従って海鱸（海で捕れた鱸）の作法でさばいたという教養の高さを物語る話を載せている。

幽斎から古今伝授を受けた烏丸光広は『耳底記』に慶長六年（一六〇一）十一月三十日に幽斎が「包丁するにさつくりといく。始の一刀にてきれねば、なにをしてもきれぬなり」と包丁の極意を話したと記している。

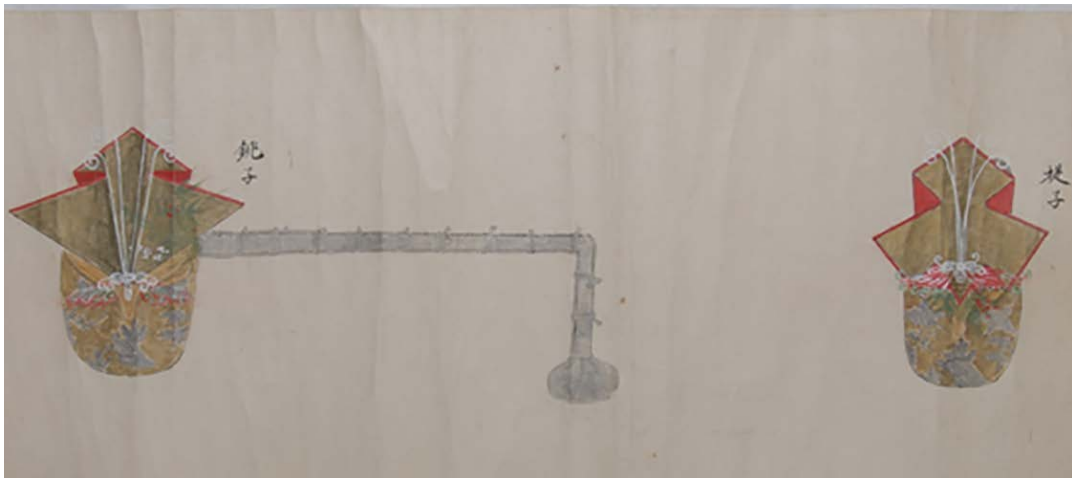
慶長十三年に幽斎は、小姓で歌道や弓馬術を含めた故実の弟子でもあった竹原惟成を、知人で在京の元室町幕府料理人の大草三郎左衛門に弟子入りさせ包丁術を学ばせている。

この時代は包丁人と料理人は区別されており、料理人は調理に携わるが、包丁人は包丁切方の式法に通じた者を指し、献立・膳椀の形色など、その時と場に応じて、故実に照合しながら決めるマネージャーで、知識人であったという。その様子は金沢藩料理方の舟木伝内包早と安信親子を主人公にした映画「武士の献立」に描かれている。

舟木包早は『ちから草』で大名の包丁人の心構えを記すとともに、主君の健康と命を預かるのが料理人であると記している。そのため料理人は武士の中でも特に信用のある責任感が強い者が任じられていた。

舟木親子が残した料理書「料理無言抄」と同じように、熊本藩では享和三年（一八〇三）に村中乙右衛門が「料理方秘」を残している。これらの書は調理方法を記したレシピ本でもあるが、式典を飾る料理を記す有職故実の書でもある。万延元年（一八六〇）十一月の十一代藩主慶順が初入国した際に花畑屋敷で供された祝膳も故実に則った本膳料理であったことが知られる。

このように正月を始めとする節句や結納などの行事、大名をもてなす供応など、行事や格式に応じて料理内容や盛り付け方が故実によって決まっていた。その有職故実の知識を持つことが武士の作法で文化であった。



行幸御成之御膳部図巻（佐川家文書）